

れ、現身に大師号もあるべし。定で御たづねありて、いくさの僉義をもいゝあわせ、調伏なんども申し  
 けられぬらんとをもひしに、其義なかりしかば、其年の末十月に十一通の状をかきてかたがたへをどろ  
 かし申。国に賢人なんどもあるならば、不思議なる事かな、これはひとへにただ事にはあらず。天照太  
 神・正八幡宮の僧について、日本国のたすかるべき事を御計のあるかとももわるべきに、さはなくて  
 或は使を悪口し、或はあざむき、或はとりも入らず、或は返事もなし。或は返事をなせども上へも申ず。  
 これひとへにただ事にはあらず。設日蓮が身の事なりとも、国主となり、まつり事をなさん人々は取つ  
 ぎ申たらんには政道の法ぞかし。いわうやこの事は上の御大事いできたらむのみならず、各々の身にあ  
 たりて、をほいなるなげき出来すべき事ぞかし。而を用る事こそなくとも悪口まではあまりなり。此ひ  
 とへに日本国の上下万人、一人もなく法華經の強敵となりて、としひさしくなりぬれば、大禍のつもり、  
 大鬼神の各々の身に入上へ、蒙古国の牒状に正念をぬかれてくるうなり。例せば殷の紂王に比干といひ  
 し者いさめをなせしかば、用ずして胸をほる。周文・武王にほるぼされぬ。吳王は伍子胥がいさめを用  
 はず自害をせさせしかば、越王勾踐の手にかかる。これもかれがごとくなるべきかと、いよいよふびんに  
 をぼへて、名をもしまし命をもすてて、強盛に申ししかば、風大なれば波大なり、竜大なれば雨た  
 けきやうに、いよいよあだをなし、ますますにくみて、御評定に僉議あり。頸をはぬべきか、鎌倉をを  
 わるべきか。弟子・檀那等をば、所領あらん者は所領を召て頸を切れ、或はろうにてせめ、あるいは遠  
 流すべし等云云。

日蓮悦よろこんで云く、本もとより存知ぞんじの旨しなり。雪山童子せつせんは半偈はんげのために身をなげ、常啼菩薩じょうたいは身をうり、善財童子ぜんざいは火に入り、樂法梵士ぎやうぼうほんしは皮をはぐ、藥王菩薩やくわうぼくは臂ひじをやく、不輕菩薩ぶけいぼくは杖木じょうもくをかうむり、師子尊者ししそんじやは頭かぶをはねられ、提婆菩薩だいばは外道がいたうにころさる。此等こゝらはいかなりける時ときぞやと勘かんうれば、天台大師てんたいは「時に適かなうのみ」とかかれ、章安大師しやうあんは「取捨宜しゆしゃよろしきを得て一向いつしやうにすべからず」としるさる。法華經ほふわきやうは一法いつぽうなれども、機きにしたがひ時ときによりて其行そのぎやう万差ばんさなるべし。仏記ぶつぎ云、我滅後わがしやうご正像しやうしやう二千年にせんねんすぎて、末法まつぽうの始はじめにこの此法華經こゝのほふわきやうの肝心かんじん題目だうめの五字計ごじけいを弘ひろめんもの出来しゆつたすべし。其時そのとき、惡王あくわう・惡比丘等あくびくしやうらう、大地微塵だいちみじんより多おほく、或は大乗おほのりやう、或は小乗せうじやう等らうをもてきそはんほどに、此題目こゝのだうめの行者ぎやうじやにせめられて、在家ざいけの檀那等だんならうをかたらひて、或はのり、或はうち、或はろうに入れ、或は所領しやうりやうを召まひ、或は流罪りゆうざい、或は頸くびをはぬべし、などいふとも退轉たいてんなくひろむるほどならば、あだをなすものは国主くにぬしはどし打うちをはじめ、餓鬼がくわいのごとく身をくらひ、後のちには他国たこくよりせめらるべし。これひとへに梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天等しよてんらう、法華經ほふわきやうの敵かたきなる国くにを他国たこくより責めさせ給たまなるべしとかれて候まうぞ。各各我弟子おのおのわがしとなのらん人々ひとらは一人もくしをもはるべからず。をやををもひ、めこををもひ、所領しやうりやうをかへりみることなかれ。無量劫むりやうけつよりこのかた、をやこのため、所領しやうりやうのために命いのちすてたる事は大地微塵だいちみじんよりもほし。法華經ほふわきやうのゆへにはいまだ一度もすてず。法華經ほふわきやうをばそこばく行ぎやうぜしかども、かゝる事こと出来しゆつたせしかば退轉たいてんしてやみにき。譬たとへゆをわかつて水みづに入れ、火かを切きるとげざるがごとし。各々思切いりきり給たまへ。此身このみを法華經ほふわきやうにかうるは石いしに金かねをかへ、糞かんに米こめをかうるなり。仏滅後ぶつめつご二千二百二十余年にせんにじふにじゅうにじゅうごねんが間ま、迦葉かじやう・阿難等あなんらう、馬鳴めみやう・竜樹等りゆうじゆらう、南岳なんがく・天台等てんたいらう、妙樂みやうがく・伝教等でんぎやうらうだにもいまだひろめ